
優しき悪魔

希和 近江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しき悪魔

【Nコード】

N7167I

【作者名】

希和 近江

【あらすじ】

法王庁の職員の間では、いつからとも分からないほど昔から、1つの噂がまことしやかに囁かれていた。

法王庁地下には秘密の書庫があり、その部屋の奥には法王だけでなく神や魔王であっても逆らえない悪魔が住んでいる、と言う噂が。

？日前：知られざる文献

オルレアンの聖女、ジャンヌ・ダルク。1412年、フランスはドンレミの生まれ。神の言葉によりシャルル7世の戴冠を助け、オルレアンの解放など百年戦争末期の数多くの戦いにおいてフランス軍を率いた20歳にも満たない少女。しかし1431年、敵国イギリスに捕らえられ宗教裁判にかけられた結果、魔女として火刑に処された。

ローマ法王庁地下にある極秘の書庫に、法王を始め全キリスト教会上層部の、更に一握りの者しか目にする事の許されない書物が有った。それは、歴史の表舞台には出てこない書物。書かれているのは、ジャンヌ・ダルクについて。

『我は見たり。彼の聖女の側近くに、1人の悪魔が付き従う姿を。悪魔は皆、残虐で人を破滅へ導くと言う。されどその悪魔、姿形はそのものなれど、心は聖なる者。彼の聖女を助け、信頼を得る。聖女が火により死した後、彼の方より託されたモノと共に姿を消す。』

『私の知る、彼の聖女についてここに全てを記す。』という文で始まった、著者不明のその書物はここで一度途切れる。この後数十ページに渡って黒々とした血がこびり付き、文字が全く読めなくなっている。奇跡的に読める部分もあるが、それらはどれも一般に広まっている、ジャンヌ・ダルクの話と代わり映えのない物ばかり。まるで、彼女と共にいたという悪魔についての情報を隠しているかのようなようだ。

ただ、最後のページで何とか読み取れる文には、こう記されている。

『聖女の側に付き従いし悪魔、その名を・・・』

“黒き神の御使い” イシュへ・カルム

『・・・と言ふ。』

2日前(1) : Sword of Saint

横浜市内某所

『……………はあ、はあ……………』

な、何で、こんな事に……………。せつかく、あの方に知られずにここまで計画が進んだと言うのにつ！なのに、なぜ……………

『なぜっ、ピアノコが出て来るんだっ！！』

『おや、私が出て来るのは、そんなにおかしな事ですか？』

壁に手をつき呼吸を整えつつラテン語で悪態をついた中年男の背に、ハスキーボイスの綺麗な同じ言語がかけられる。

『今回の事はあの方に関わりある事。ならば、組織の中で1番親しくさせて頂いている私が、あの方の直属である私の部隊が出てくるのは当然でしょう。』

『ピアノコー！』

慌てて振り返った先には、真っ白などこかの軍服を着た性別不明の人が立っていた。その人の着ている軍服の袖や胸ポケットなどには、黒い翼を背にした赤い逆十字と“Sword of Saint”と言う金色の文字が刺繍されている。

『く、くそ……………』

悪態をつきつつ中年男は懐へと手を伸ばすが、目的の物を取り出す前に全方向から自分に向かって銃の先が向けられた事が、複数が1つの音として聞こえた銃を構える音で分かってしまった。

『大生際が悪いですよ。所詮あなたは普段銃など扱わない文官、対して我々はいつも人や人ならざるモノを相手にする事を目的として訓練している武官。さらに、ここにいるのはその中でも精鋭中の精鋭、私の可愛い部下である白の1番隊……………なめてもらっちゃあ困るな。』

4日前(1)：到着

深夜 成田空港

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜になり、その日の最終便も1時間以上前に到着してしまい閑散としているバスターミナルに、黒い服に黒い外套を羽織った青年が腕を組み、眼を閉じて壁にもたれながら静かに立っている。足元には、使い古された小さなトランクが1つ。それ以外の荷物は見当たらない。青年は両目を閉じ軽く俯いているので、寝ている様にも見える。そこへ、酔っ払っているのか、ふらふらと揺れ動く男が近付いて来る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青年は本当に立ったまま寝ているのか、近づく男に全く気付いていない様子のまま動かない。男は少しずつ青年に近づき、とうとうトランクの側まで来た所で一度全ての動きを止め、次の瞬間には打って変わり俊敏な動きで足元へ手を延ばす。男の顔には、下卑た笑みが見えかかっている。この男、置き引きの常習犯で、今日の最終便が到着してから1時間も経つ深夜のバスターミナルに、無防備な若い男が1人でいると言う普通ならおかしいと思う状況だが、気の緩みからいつも通り成功すると過信してしまった。しかし、トランクまで後5センチ程で手が届くと言う所で、突然ちよつとした浮遊感を感じ、その事に気付いた時には背中を地面に打ち付けていた。

「・・・・・・・・がはっ！」

激痛から意識が飛ぶ前に、彼は今夜の獲物の顔と、その反対側に翻る黒い服の裾を目の端に捉えた気がした。

「・・・・・・・・遅くなりまして、申し訳ありません。お迎えに上がりまし

た、公爵様。」

燕尾服をきつちり着込んだ若い 先程からこの場にいる青年より年上だが、まだ20代前半に見える 男が、舞台役者の様に一礼し謝罪する。いつの間にか現れた彼の背後に、同様にいつの間にか現れた長いリムジンが停まっている。

「………構わぬ。が、目立つのは好かぬ、行くぞ。」

初めて発せられた公爵と呼ばれた青年の声は、見た目通りの10代後半だが、声音に含まれた威厳は老成した古老を感じさせる。

彼の言葉に従い車に乗るため、荷物を運ぼうと小さなトランクに伸ばされた手は、相手がいつの間にか持っていた杖によって阻まれる。

「死にたくなければ、触れるな。」

「私がいつも公爵様の身の回りお世話を命じられるのは、組織の中で公爵様のコレクションへの耐性を1番多く持っているのが私だから、というのが第1の理由なのですが……。」

「私自身が選出したのだから、言われずとも知っている。」

「では……。」

「……そなたは、いつ気化する物にも耐性を持ったのだ？」

世話係は公爵の冷やかな声に、慌てて手を引いた。彼はそんな相手の反応を気にせず、依然眼を閉じたままトランクを左手に、杖を右手に持って車に向かった。その後を少しぎこちない動作で世話係が追い掛け、車の扉を公爵の為に開ける。そんな彼に、公爵は乗り込みながら1つの指示を出した。

「あの悪戯者を、風の当たらぬ所へ移してやれ。」

杖で指し示された先には、先程の置き引き犯が白目を剥いて倒れていた。

4日前(2)：問題発言

車内には静寂が降り積もり、用意されていた紅茶が冷めきった頃、唐突に公爵が口を開いた。

「・・・向こうに着いてからは、私が良いと言つまで公爵と呼ぶな。」

「は？」

唐突な言葉に、世話係は冷めた紅茶を片付けていた手を止める。

「今回の休暇は急に思い立ったものでな、組織の上層部にも秘密で来ている。今頃ヴァチカンの奴らは騒いどるかもしれんが、そんな事は私の知つた事ではない。」

「こ、公爵様?!」

慌てて公爵に詰め寄ろうとする世話係を、彼は片手を振って軽くあしらう。その自然なあしらひ方、態度、その他を見ても中世ヨーロッパの大貴族そのものに見える。外套を脱いだその服装自体が中世の貴人が着ていたフロックコートの様な物であり、杖も銀の装飾が施された歪みの無い上等な物だと一目で分かるので、これでシルクハットでも持っていたらまさに上流貴族の子息と言つても時代が時代なら通じたであろう。

「慌てるな、一応置き手紙はしてきた。いつ見つけるかは、奴らの手際しただいだが。」

「あまり、そういう事はなさらないで下さい。公爵様の身に何か有つては・・・」

世話係の諦めつつも心から心配する言葉に対し、公爵は自嘲気味の笑みを浮かべる。

「何が有るといふのだ。・・・とにかく、今現在この国に来ておるあの小僧に知られては意味がない。よつて、そつだな、私の事は『イル』とでも呼べ。そなたの事は、今まで通り『橘』と呼ぶが問題無かるうな?」

「問題などありませんが……先日50歳になられた法王補佐官様を小僧、と呼ばれますか。」

2、3日前から内密に訪日中の組織幹部の事を思い浮かべ、世話係改め橘は苦笑した。

「本来なら私やルシフェル達から見れば、どれだけ歳をとつていようが今生きている人間など全て赤子以下だ。」

橘は会話の中に出て来た名前に反応して一瞬動きを止めたが、すぐにごまかすように片付けを再開して会話を続ける。

「……ルシファー様は、お変わりなく？」

「ここ何年もの間、私をこちら側に留め続けた組織の人間の言える事ではないな。……まあいい、これに関してはそなたの責任ではないからな。奴なら最後に会った時と変わらず、王としての勤めをはたしておろうよ。私もいない事だしな。」

入れ直された紅茶を1口飲んでから、笑みを含んだ声でイルは続ける。

「そう言えば、奴について何ヶ月か前に面白い噂を耳にしたぞ。」

一向に開かれる気配のない瞼の奥にある瞳が、今現在どのような光を湛えているのかは分からない。しかし、隠された瞳が自身の顔を射ぬいていることを、彼は自分の顔に向けられたまま全く動くことのないイルの顔から悟ってしまった。

「この数百年、人間と契約など交わさなかった魔王殿が、今日から3ヶ月と3日前の夜に契約を交わしたらしい、この国の人間と、ななあ橘よ、その人間はそなたによう似た、橘という名の男らしいぞ？」

橘の顔色が急激に悪くなり、首を左手で押さえながら苦しそうにもがきだした。彼の突然の行動に合わせて、車内を煌々と照らし出していた明かりが少し陰った気がする。しかしその様子を全く気にする事なく、イルは新たな紅茶を自分で注いで優雅に飲み続ける。

「……も、申し訳、ありません……っ！」

橘はやつとの事で言葉を紡ぎ、最後にいつそう苦しそうな声を出

してから荒い呼吸をし始める。

「別に、そなたは私と契約している訳ではない。だから、私の知らぬ所で何をしようと問題などない。私自身や私が庇護する者に関わりなければ、な。．．．しかし、そなたが私と出会ったのは18年前、ルシフェルとはその半分ほど。それを考えると、私に一言くらい有ってもよかったと思うが？」

「．．．あ、い、いえ、お話ししようと思いましたが、祭事の前で取り次げぬと．．．．．」

かすれた声で言い訳を始める橋に、イルは杖の先を突き付けて先を続ける事を認めない。

「誰が契約前の話だけをしている？」

顔は怒っているかのように無表情だが、イルの声音には笑みが含まれたままなので、怒っているわけでも相手を責めている訳でもなく、ただ単に世間話の延長の様な物で状況を楽しんでいるだけという事は、今までの経験から分かっている。それなのに、橋の背筋には冷や汗が伝い、車内の温度が急激に下がった様に感じられた。

「た、たとえ事後報告になったとしても、お伝えしようと思いました。しかし、何度お願いしてもそちらの、ヴァチカンの司祭殿が今は無理だ、取り次げぬと．．．．．」

「ふむ、確かにそれはその司祭の不手際だが、この様な時こそ何故奴に頼まん？」

「まあまあ先輩、それ位にしてやってよ。それに関してだけは、悪いのはこいつじゃなくて俺なんだから。」

4日前(3) : 途中乗車

ついさつきまで、声だけ聞けばどこか楽しそうに問い続けるイルと、だんだん顔色が青から蒼白へと変わりつつあった橘以外、この長大な車の後部座席にはいなかったはずだ。それなのに、橘が気付かない内に乗客数が1人分増えていた。

「そう思うのなら、次からはもっと早く出てくる事だ。」

「いやー、先輩がなかなか戻ってきてくれないもんだから、俺もいろいろ忙しくつてね。こつちに来る直前には、他の公爵達からかなり理不尽に思える文句言われるし。」

途中乗車の声は、橘の頭上から聞こえてきた。それと共に橘は頭には人の吐息を、両肩には痛みを伴った重みを感じた。イルにとって自分や自分が探しているモノに関係しない限り何が起ころうとどうでもいい、橘にとっては彼の登場は毎回突然で突拍子もない事をやってくるので、最近では表情に驚きを出す事がなくなってきた。

心中では心臓が止まりそうなほど驚いているが……。

「橘、俺にも茶あ煎れて。あ、紅茶じゃなくって緑茶。当然きゆうすで。」

橘の頭に顔を寄せ、彼の肩に肘をついた格好のまま、イルと同じ紅茶を注ごうとしていた彼に別のお茶を注文するのは非常識な20歳前に見える人。否、人ではない。姿形は人ではあるが、当然模造品ではない6枚の翼が背中に見えるヒトを、人と呼ぶのはおかしいだろう。彼は大変美しい容貌をしており、宗教画の天使のようだ。しかし、その翼は白ではなく黒なので墮天使、もしくは墮落の世界へと人を誘惑する悪魔と言うべきだ。

「か、かしこまりました。が、そろそろ、降りて、頂けないでしょうか、ルシファー様。」

橘の必死の抗議を受けて、なぜか渋々といった感じで青年、ルシファーは橘の隣であり、イルの真正面である席に座る。その背から

は、いつの間にか黒い翼が消え、今ならどこからどう見ても普通の人間なのだが、顔だけを見るとなぜか橘には軽薄な遊び人の青年、もしくはやり手のホストのように見えてしかたが無い。そして服装を含めて見ると、ビジュアル系のロックシンガーに見える。

「ルシフェル、今回のような手間をかけてまで、私をこの国へ呼び寄せた理由は何だ？」

「そう言うけど、先輩、ホントは分かっているんでしょ？」

それなりの真剣さを持って問い質すイルに、ルシファーはあくまでひょうひょうと質問に質問を返す。

「適合者かもしれない少女が現れた事か？あの小僧がその事を私に知らせずに、何かを画策している事か？悪魔がこの世に召喚された事か？その悪魔が違反行為を行っている事か？」

淡々と続けられる言葉に、ルシファーは全部と答えて茶をすすする。「分かっているなら説明する必要ある？」

「風の噂として聞いただけの情報であって、今言った事は私の中で明確な事実としては認識できていない。このような状態では、私は動けんよ。“力行使するは、事象全てを理解した時のみ”だ。」

面倒臭いと顔に書いて茶のおかわりを要求するルシファーに、自嘲気味の笑みを浮かべて説明を要求する。

「なあんで、そんな面倒臭い制約作ったかな。」

「不安だったのだろうよ。奴らはある時、制約なくして私の怒りから自身の身を守れるとは思わなかったのだろう。……それで？いい加減、今回の事について話せ、ルシフェル。」

イルのちよつとした間と、正された姿勢だけで、その場の空気が変わる。いつもの緊急時以外に流れる空気に安心しきっていた橘は急に息苦しくなって身じろいだだが、ルシファーはそんな事は意に介さず、そのままの雰囲気では話を始めた。

「事の起こりが問題の少女の発見からだとすると、だいたい3ヶ月半前かな？あのバカは、先輩の探している該当者候補がいると、組織の日本支部にいる手駒から情報を聞き、まあいろんな事を無い頭

で考えた結果、先輩には内密でその少女を手中に収めようと考えた。でも、先輩を相手にするには唯の人間であるあの小僧じゃ到底勝ち目ないでしょ？だから、さらに愚考した結果が聖職者でありながら悪魔を召喚する事。お、茶柱。」

ルシファーは真剣な話をしている最中でも、橘から渡された湯飲みに茶柱を発見して子どものように珍しがる。彼のこの態度はイルにとつてはいつもの事なので大して気にしないが、傍で話を聞いている橘はいつイルが不機嫌になるかと気が気で無い。

「召喚された悪魔は、契約に関する規約に従って小僧の命令を聞いて、小僧にとつて邪魔になる者達を排除したりしているんだけど、その命令以外の所で結構な血を流して、先輩達と定めた決まりを破って違反してんだよね。ただこの違反に関しては、魔界にいる別の悪魔が一枚噛んで、そつちの悪魔は押さえたんだけど、例によつて今現在契約でこつち側に干渉してるその違反悪魔には、俺じゃあ手が出せないんで、先輩にお出まし願ったつてわけ。」

飲み終わって空になった湯飲みを、ルシファーは指先で器用にくるくると回して遊ぶ。今回のイルの来訪に合わせて用意した、彼のためのそれなりに値のはる伊万里焼の湯飲みであるため、橘は落とされて割れないかハラハラして見守っていたが、急にルシファーがイルに向かって投げたので“ムンクの叫び”のような顔をして固まってしまった。

「その違反悪魔なんだけど、ベルゼの息子でシャサムって言うんだ。」
「シャサム？七大侯爵の子であつて私が知らぬと言う事は、この200年の内に生まれた者か。」

ルシファーの突然の行動に対しても、橘以外は全く動じない。しかし、これ以上精神的ストレスで橘に壊れられても面倒なので、イルは湯飲みを軽くキャッチし、そのまま橘へ渡して話を続ける。

「確か、生まれて150年位だったと思うよ。それで、ベルゼからの伝言。『私の教えが甘かったばかりに、公爵様には我が愚息がご

迷惑をおかけいたし、大変申し訳なく思います。通常の違反者と同じく、いえそれ以上に厳しく罰して頂いて構いません。公爵様のお決めになった事ならば、我が一族は何の異も唱えません。公爵様の目的が達成され早く異界へ戻られる事、公爵様の下僕であり子である我ら七大侯爵一同、お待ち申し上げております。』だとさ。ちょっとばかり短縮したけど、大体の意味はこの通りだから。いやはや、愛されちゃってるね、せ・ん・ぱ・い！」

「五月蠅い、馬鹿兄。」

4日前(4) : 途中乗車、再び

ちやかす声にイルは何の反応は示さなかったが、別方向、橋を挟んだ隣から苛立ちまぎれの声が飛んできた。その声で、自分のすぐ傍でまたもや乗客が増えていた事に気付いた橋がそちらに目を向けると、そこには天使がいた。

比喩でも何でもなく、まさしく天使。宗教画に描かれるようなひらした服ではなく、重要な式典で司祭達が着る礼服に似た物を着ているが、模造品ではない純白の6枚の翼を持ち、頭上に金に光る輪を持っている。金の髪に青い瞳だが、その顔立ちはどう見ても黒髪に紅い瞳を持つルシファーと同じだった。

「ひっさしぶりー、ミカエル。」

ルシファーと同じように翼を消して座席に座ったミカエルに、ルシファーがいつものように声をかけるがミカエルは不機嫌な顔をしただけで返事をせず、イルと橋とだけ挨拶を交わす。視界にも入れたくないのか、イルと橋としか目を合わせて言葉を交わそうとはせず、ルシファーがどれだけ話しかけても丸無視だった。

「相変わらずだな、お前達兄弟は。」

「このような者を、兄だと思いたくもありません。」

「つれないなあ、ミカちゃん。」

「誰が『ミカちゃん』かつ！！馬鹿兄！！」

ルシファーの一言にミカエルが怒鳴り返したが、すぐにしまったと言う顔をして自己嫌悪におちいる。イルは何も変わらないが、ルシファーは上機嫌になって嬉しそうに笑い、橋はほぼミカエルと同じ立場にいたので同情の眼差しを向ける。

「ミカエル、そろそろ何用か聞こうか？」

イルの言葉で我に帰ったミカエルは、非礼を詫びてから下界へ降りてきた用件を伝えた。

「彼の方の御言葉を御伝えしに来ました。今までと変わらず、該当

者が見つかったとしても、いつアレを取り出すか、その者をどうするか、全て貴方様の判断に御任せするとの事です。」

「神は相変わらず、私に甘い。」

伝えられた用件にイルは一瞬自嘲の笑みを浮かべるが、それに氣付いたミカエルや橘が何か言おうとする前にその笑みは消え、神への返答を口にする。

「御心遣いいたみいる。しかし、今回の件に関しては愚かな若造が早とちりしただけ、もうしばらく人界にいる事になりそうだと、そう神には伝えてくれ。」

「畏まりました。他に、何か御用はございませんか？」

イルに対して完璧な受け答えをするミカエルだが、声の抑揚や視線などからイルともっと話をしたい、役に立ちたいと思うが、これ以上2つ隣に座る馬鹿兄と同じ空気を吸いたくないという思いが伝わってくる。それを察したイルは苦笑しつつ、この天使が最も喜ぶ言葉を告げてやる。

「これと言って急ぎの用はない。ただ、今回の件に違反を犯した悪魔が絡んでいる。近い内、その者の始末をつける為に呼ぶだろう。」

「はいっ！」

慕っているイルからミカエルが呼び出される事は滅多に無い。そのため、仕事とは言え向こうから声をかけてくれるという約束を聞いて、傍から見ても分かるほどミカエルは舞い上がった。しかし、そんなミカエルの嬉しい気持ちに水をさす者がいた。そんな事が出来るのは、この4人の中で唯一人、ミカエルの双子の兄である魔王様だった。

「ミカちゃん、俺と橘、契約したから。」

湖の静かな水面のど真ん中に向かって爆弾投下。

「あ、あの、今回の件が片付くまでで、終われば白紙に戻る形だけの物ですから……。」

整備不良から爆弾不発、と思いきや……

「えー、そんなの面白くねえよ。」

姑息にも時限式だった。

「契約時に私か私以上の力を持った者が立ち会わなければ、ルシフェルの場合は完全には成立しない。よって、今回は諦める。」

爆発物処理班の迅速な行動で、カウントダウンはストップ。

「神に許可もらったぜ？」

しかし、そこに愚かにも火種を持った男が乱入。

「こんの、クソ馬鹿兄貴っ！人の気も知らないでいつも勝手に決めちゃがって、お前なんか、大ッ嫌いだーっ！！」

静かな水面は消え去り、耳をつんざく様な音とともに跡形も無く湖は消えた。つまり、ミカエルは様々な思いから怒りが込み上げ、涙を流しながら本音を叫んで天界へ帰っていった。

「いくら妹が可愛いからと言って、いいかげんにしないと繋がりを切られるぞ。」

人間と同じ方法ではなく“卵の樹”と呼ばれる樹から生まれてくる天使にとつて、双子の天使は珍しい。“卵の樹”ではなく神の放つ光から生まれた原初の天使の中で、双子として生まれた天使はさらに少なく珍しい。双子の天使は離れていても心が繋がっているため、思うだけで相手に想いを伝え言葉を交わす事が出来る。ミカエルは周りの天使にルシファーが墮天したと共にその心の繋がりを切ったと言っているが、まだ切っていない事をルシファーは感じているし、イルも知っている。

「良いの、良いの。これは俺なりの愛情表現なのよ。」

イルのミカエルを思っ出てきた忠告に、ルシファーは文字にすれば語尾に音符が付いていそうな程満面の笑みで答える。それを見たイルはいつもの事と思って1つ溜息をついただけで関心をなくし、ルシファーとそっくりな性格をした者を身内に持つ橋は心の中でミカエルに同情した。

4日前(5)：行動開始

しばらく車内にはイルの持つカップがソーサーに触れる音しかなかったが、楽しそうな笑みを浮かべ続けていたルシファーが突然真面目な表情に変えて声を出した。

「それで、先輩はこれからどう動くの？」

その問いかけに、イルは持っていたカップを目の前の机に置き、橋へと軽く合図する。それを受けて、慣れたように橋は新しい紅茶をカップに注ぎながら頭に入っている情報を舌に乗せる。

「補佐官が狙っているのは、今向かっている日本支部から数キロ離れた所にある高校に通っている高校生で、名前は神野 朝霞さん。

“右の掌”に、イル様が探しておられるのに似た痣があります。イル様をお迎えに向かう直前に入った情報では、補佐官は別の支部へ向かうと言って出かけられましたが、都内にあるホテルへと入りそこから内密に連れて来ていた私兵に神野さんを監視するように指示を出したようです。」

橋が言葉を切った丁度その時、彼の着ていた服の内ポケットで携帯が微かに震えた。それに気付いてイルとルシファーに断ってから携帯に耳にあてると、どうやら相手は彼直属の部下だったらしく、眉間に皺を寄せながら新しい情報に耳を傾けた。

「失礼しました。」

「補佐官が動いたか？」

再び携帯を内ポケットにしまう橋に、気にするなと手を振ってからイルが尋ねると橋は頷き返した。

「はい。どうやらイル様が本部を無断で出られた事が耳に入ったようで、明日動くようです。今の所の計画では、神野さんが登校する前に家に押し入るつもりようです。」

「明日とは、また急なこった。先輩が何のために何処に行ったかも分かってないだろうに、あのバカは相当焦ってるみたいだな。それ

で、先輩はどうするの？」

「白の一番隊を動かす。ピアノコを始め、あの部隊の者がすでに夕方の便で日本に入っている。」

フンとバカにしたように鼻を鳴らしてから問いかけてくるルシフアーに、イルは何でもない事のように返した。その言葉にルシフアーは楽しそうに瞳を輝かせるが、橘は傍から見ても分かるほど動揺して持っていたティーカップを大きな音をさせて机に置く。その音で我に返った彼はすぐに他の2人に詫びるが、その顔は苦虫を噛み潰したように眉間に皺を寄せて不快感をあらわにしている。

「ルシフェルとミカエル同様、お前達も相変わらずのようだな。」

イルが溜息をつきつつ言うと、橘はあからさまに目を泳がせる。それに苦笑するも、イルはその事についてそれ以上は何も言わずに話を戻す。

「ルシフアー、異界へ戻る前にピアノコに言付けてくれ。神野 朝霞とその周囲を守り、小僧をここへ追い込み私が行くまで包囲するように。それに付随する作戦等、全てをピアノコに任せるが、神野 朝霞や一般人を始め、小僧の私兵に傷を付けずに終わらせる事。

また、可能であれば無関係である神野 朝霞達一般人に悟らせる事なく終わらせるように、と。」

「りょーかい。」

イルが言葉とともに何処からともなく取り出した紙片を受け取りつつ、ルシフアーがさも面倒だと言った顔をして返事をする。

「何か問題でも？」

「いんや、問題なんてないけどさ。ピアノコとは久しぶりに会うし、あの部隊の奴らとは気が合うから良いんだけど、あの部隊が使う武器に近づくと未だに悪寒が走って嫌なんだよな。それに、ピアノコの副官の子、俺が行くと溜息ついて睨んで来るんだもんよ。」

「あの副官が睨んでくるのは、お前がピアノコの書類仕事が溜まっている時を狙ったように訪れるからだろう。ピアノコはお前と同じ性格をしているからな、平時にお前が来ればピアノコは仕事を放置

してお前と遊ぶ事を選ぶ。その間の急ぎの仕事をやっているのは、
全てあの副官だ。何度もそんな事があると、睨みたくもなるだろ
よ。しかし、安心しろ。今回あの副官はヴァチカンで留守番をして
いるし、あの部隊が今回持ってきた兵装には、ピアンコの銀弾以外
は対魔用の武器はない。」

「それはもつと早く言つてよっ！じゃ、行つてくるねっ！」

ルシファーは苦虫を噛み潰したような顔を、イルの言葉で瞬時に
歡喜の顔に変えて大声を上げると、前触れもなく煙のように姿が消
えた。

「はあ、ルシフェルは相変わらず騒々しい。」

「そう、ですね。」

イルがルシファーの座っていた場所を見つめて苦笑すると、つら
れるように橘も苦笑を浮かべ同じ所を見つめた。

「まあ、騒々しいが、それが奴の良い所でもある。・・・契約や
組織の事に関わらず、これからも奴と関わりを持つ気があるのなら、
ルシフェルの事をよろしく頼む。」

「・・・はい。イル様に頂いたこの名にかけて。」

何かを含んだイルの真剣な言葉に、橘はその真意を汲み取ってか
床に膝をついて恭しくお辞儀をした。それを受け、イルはルシファ
ーを思つて浮かべた親愛の表情をさらに深くする。そんな彼らを乗
せて、その長大なリムジンは郊外にある目的地に向かって静かにひ
た走る。車内には何度目かの静寂が降り積もるが、十年近く主従関
係にある彼らにはその静寂は心地よいものを感じられた。

？日前：閑話（前書き）

とある日の二人の会話。

会話文のみです。

ほぼ本編に関係のないバカ話です。

彼が彼の事をそう呼ぶ理由とは？

? 日前：閑話

『ところで先輩、いつまで俺のこと“ルシフェル”って呼ぶのさ？』
『今更な質問だな。』

『だって、“リヴィ”や“アス”はちゃんと“リヴァイアタン”とか“アスモデウス”って呼ぶのに、俺は“ルシファー”と呼んでくれないじゃん。まあ、だからと言って、どっかの誰かさんみたいに“ルーシー”なんて女性形の愛称で呼んでほしくはないけど……』

『“ルーシー”？誰だ、そんな似合わない呼び方をしているのは。』
『先輩もそう思うっしょ？てことで、先輩からやめるように言っよ。あの人先輩の言う事しか聞かないんだから。』

『神か。それなら、諦める。』
『何でさっ?!』

『神が無条件で私の頼みを聞いてくれると言っても、それは世界に被害が出るような事だからであって、他に被害が出ないような私の頼みなど聞かぬし、それが面白い方へ転がるような事なら尚更だ。何より、私も見ていて楽しいからな、ルーシー。』

『ルーシーはやめてっつての、先輩!』

『ルシファー、その先輩というのをやめるのなら、考えても良いぞ。』

『考えても良いって、それ絶対考えるだけで変えないつもりっしょ!』

『それは、アスモデウス達は言いつけ通り呼び名と真名を別のモノにしたのに、お前がそうしなかったからだろう。不本意な事に、私の力はお前達七大侯爵よりも強い。いくら信賴していると言っても、自分より強い者に真名を知られると言っ事は、その者にただ名を呼ばれるだけで命を握られると言っ事。お前も、無闇に私に命を握られたくなかろう?』

『そんな事気にしなくて良いのに。』

『私は気にしている。だから、お前が呼び名と真名を別のモノにしない限り、私は呼び方を変える気はない。』

『頑固者。』

『……これは頑固と言うのか？ルーシー。』

『だから、それはやめてっつてのっ！』

『神が直々に付けてくれた愛称だ。良いじゃないか、ルーシー。』

『……神の、バカ野郎おー！..!』

2日前(2) : 力の差

横浜市内某所

「……というわけで、貴方があの方が動いた事に気付くもつと前から、私達は動いていたという事です。」

「くそお！」

「ああ、あまり無駄な時間を過ごさせないで下さいよ。私達は貴方と違って、豪遊出来るほど暇でも無能でもありません。因みに、今回の豪遊、一例を挙げるなら高級料亭での芸者遊びなどなど、経費で落とす事は出来ませんので悪しからず。」

ピアノコは悠然と構えて、拳銃を握ったままの法王補佐官を見下ろす。

「……を……な。」

「はい？」

「……私を、見下ろすな！こやつらを殺せ、シャサム！！」

叫びに応じるように補佐官の影が伸び上がり、そこから人影が現れた。人間での年齢で見ると、およそ15、6歳の青年で、燃えるような赤い短髪を逆立て、同じように赤い瞳を持つ目は吊りあがっている。耳の先は尖り背には蝙蝠のような翼を持っている、見た目からして正真正銘の悪魔だ。

「ヒヤツハア！いっぱい血が飲めるぜえ！」

楽しそうに奇声を上げて常人には見えない速さで走り出し、一番近い所にいたピアノコに向かって黒く長い爪を突きだす。後数センチで喉元に突きたつと言うところで、1発の銃声が響き、シャサムは背中の方で激痛を感じた。

「……な！」

視界の端では黒い物が飛び散り、目の前では硝煙をあげる銀色の拳銃を持つ手が見えた。

『……人間なら死に至るほどの傷を負っても痛みを感じない高位の悪魔であろうと、聖なる加護を受けた銀の弾丸で羽を撃ち抜かれれば、さすがに痛いでしょう?』

ビアンコはシャサムが現れる前と変わらず悠然と立ち続け、苦悶の表情を浮かべて膝をついたシャサムを見下ろす。

『人間との契約に関して違反を犯した悪魔について、数日前にとある方から情報を貰いました。その悪魔はほんの150年程前に生まれたばかりの悪魔の中ではまだ若輩者で、力もそれほど身についていない。その悪魔の名は、七大侯爵の内、“暴食”を司る蠅の王・ベルゼブブの末子でシャサム♯♯。』

『下等な人間の分際で、我を見下し、我が名だけでなく我が母の名を呼び捨てにすることは、この身のほど知らずが!』

シャサムは激怒し、傷ついた羽を庇いながらも、宙に飛んでビアンコを見下ろした。そしてどこからか取り出した大鎌を振り上げ、ビアンコに向かって振り下ろそうとしたが、ビアンコによって傷ついていない側の羽を撃ち抜かれる方が早かった。

『身のほど知らずと言われましたが、私は七大侯爵全員から溜口をきき、対等な立場に立つ事を許されている身ですから、対等か目上に見なければならぬと思っていない相手からそのように言われると、虫唾が走って仕方ありません。……何より、私を見下ろして良いのは、1人だけだ。これを機に、人の身でありながら悪魔をねじ伏せられる者として、私の名を覚えておくといい。私は、法王庁直轄軍において精鋭ばかりが集められた彼の方直属の白の1番隊長および、非常時には直轄軍全軍の指揮官を務めるビアンコこと橘 白鳳^{はくほう}。私に見下ろされたくなくば、私に認められる程の力と社交性をつける事だ。』

言葉の最後にビアンコは再び地に足をつけたシャサムに向かって、幼子に対するように微笑んだが、その目は冷え切っていた。しかし、シャサムはビアンコの口上を聞いてはおらず、さらに激怒して目は血走り、その身を震わせて叫んだ。

『……してやる！殺してやるぞ、貴様ア！！』
『……私はその者を気に入っているのだ、それは非常に困る。』

ビアンコが身を引いて道を開けた先には、この国に着いた時と同じように黒い服に黒い外套を羽織って、小さなトランクを持ったイェルが立っていた。1歩下がった位置では、彼が愛用している杖を持った橋が影の様に付き従っている。

『あ、ああ……！』

補佐官は顔を青ざめさせ微かに喘ぎ声をあげて恐怖し、シャサムも金縛りにあつたように恐怖を顔に出してその場に固まってしまった。

『お前達白の1番隊には、こちらの問題で手数をかけてしまい、すまなかった。近い内に私から特別手当と有給休暇取得の許可を出しておこう。ビアンコ以外は撤退し、休んでいてくれて構わん。』

イルの言葉に、周りを包囲していた隊員達はいつせいに敬礼し、音もなく撤退していった。その場には、イル、ビアンコ、橋、そして恐怖に囚われたままの補佐官とシャサムだけが残された。

2日前(3)：裁定

『……さて、お前達は私を差し置いてずいぶん勝手なことをしてくれたな。まずはシャサム、お前の処分についてだ。』

名を呼ばれたシャサムは、1度大きく身体を震わせてから、ゆっくりとイルの方へ顔を向けた。

『分かっているだろうが、お前は1つ重大な違反を犯した。その契約者の命によってお前はいくつかの人間の命を奪い、他にも色々力を使って悪さをした。しかし、それは契約による鎖に縛られている事であるため、命令した契約者に罰が跳ね返るだけでお前の非となる物ではない。しかし、お前は契約以外の所で、私的に罪のない人間の血を流すと言う違反行為を行った。その罪は、おまえ自身が償わなくてはならない。』

シャサムはイルの言葉に反論するでもなく、ただ頂垂れたように下を向いて言葉の続きを待つ。

『我、悪魔と人との契約に関する断罪者は、シャサム・ブブへの裁定を言い渡す。……七大侯爵ベルゼブ配下、アスタロトを守り役につけ中天の牢に一時投獄。投獄後の事は追って伝える。中天の牢における監視者は定めにある通り、枢密院魔界代表である七大侯爵にして魔界を統べる王であるルシフェル、そして枢密院天界代表である火を司る熾天使ミカエルとする。……ルシフェル、ミカエル、ここへ。』

呼びかけに応じるように、鳥の羽ばたく音と共にルシファーとミカエルが舞い降りた。2人の表情は、数日前に車の車内に現れた時と同じように、ルシファーは状況を楽しんでいる様な笑みを浮かべ、ミカエルは不機嫌と一目で分かる顔をしていた。否、ミカエルの不機嫌さはたった数日で更に酷くなったようだ。

『聞いていたと思うが、中天の牢でのシャサムの守り役はアスタロトに命じる。ミカエルはこのままシャサムを中天の牢へ送り、ルシ

フェルはベルゼに事の顛末を伝えてアスタロトを中天の牢へ向かわせる。』

『それが貴方様の命ならば。』

『先輩がそう言うならね。それじゃまた来るから、そんなときや酒でも飲もうぜ、ビアンコ。』

それぞれの言葉でルシファーとミカエルが返事をする、シャサムを含む3人は光に包まれ、次の瞬間にはその場から消え去っていた。

『……さて、法王補佐官フォルネ・リカルド。宗派に関係なくキリスト関係の全ての教会と私との間で交わされた契約、私の知識や力等を目的が達成されるまで全教会に貸す変わりに、私の探し人に関する情報は手に入れ次第報告し、その後何らかの結果が出るまで関わる事なかれ、と言う物を筆頭にしたいいくつかの契約を反故にした責任は重いぞ?』

イルの重々しい声が、狭い路地に反響し、補佐官ことフォルネに重くのしかかる。

『何より、今回狙った少女を含め、ただの一般人を巻き込んではいかな。』

イルの言葉に少し引つかかりを感じたが、それを追求する権利も気力もフォルネは持ち合わせていなかった。

『少女も無事であったし、その事についてはまあいい。そなたの処分についてだが、この契約を違反した者は死、もしくは組織の軍部にて無期の兵役に就く事で贖うべし、と決められている。どちらであつても最終的には死と言う選択しか残されておらぬが、1度だけ選択権をやる。』

イルは自分の持っているトランクをフォルネによく見える位置に持ち上げつつ、軽く口の端を歪めて言葉を続ける。

『その懐に入っている物で自分の頭を撃ち抜くのと、兵役の変わりに私のコレクションから1種類選ぶのとどちらが良い?』

イルの言う彼のコレクションとは、彼が持っているトランクの中

身だが、その中身とは“毒薬”だ。それも、普通では手に入らない物や、歴史の闇に消えて今では存在しないとされている物も含まれ、極め付けが魔界でしか手に入らない物やイル自身が調合して作った解毒薬の存在しない物まで有る。

『此度持ってきたコレクシオンは、43種類。中にはボルジア家独自の猛毒“カンタレラ”や、一般的に知られている“トリカブト”なども有るし、魔界でしか手に入らない“氷獄の鎖”と呼ばれる物も入れている。しかし、毒薬を使う者はいざと言う時の為に解毒薬も持っているし、私も例外ではない。そして、それはこの43種類の中にも入っている。更には、その解毒薬には天界でしか手に入らない、この世に存在する物なら何でも、例え魔界でしか手に入らない“氷獄の鎖”であっても解毒し、人が飲めば不死となると言われている“神の息吹”が含まれている。』

普段とは違い、少し感情を高ぶらせて長い言葉を続けたイルが、1度間を取って普段の声音である提案をした。

『選択権と共に、1つチャンスをやろう。なに、簡単なゲームだ。』
そう言っているイルは、外套の下から数十枚のカードの束を取り出した。

2日前(4) : ゲーム

彼がカードを表にして月明かりの下へと出すと、1番上のカードには石積み塔に雷が落ちる絵が描かれ、下の方には“???”と“The Tower”と描かれている事が分かった。見る人が見れば、それがタロットカードの大アルカナの1つ“塔”のカードである事が分かっただろう。

『タロットカードの大アルカナは22枚。それぞれに正位置と逆位置があり、大概が出た方向によって意味が正反対となる物だ。ただし、今1番上に来ている“The Tower”のカードは単純にはどちらもよくない意味を表している。カードの示す意味で考えればカードは44種類だが、この“The Tower”のカードは今回正逆を考えないとして43種類。今ここにある私のコレクションの内22種類が毒薬で、残り21種類は解毒薬だ。ここまで言えば、そなたでも分かるだろう?』

フォルネだけでなく、この場にいる誰もが理解した。つまり、タロットカードでロシアン・ルーレットをやるのだ。イルがゆっくりとトランクの蓋を開けると、準備のいい事に、細かく区切られた仕切りの中に、タロットカードの大アルカナに存在するカードの名前が記された小瓶が並んでいる。おそらく、後半部分の文字が逆さになっている瓶は、カードの逆位置を示しているのだろう。

『更なる慈悲だ。毒薬の多くは、この小瓶に入っている量では気分が悪くなるだけで、死に至らない物だ。……さて、夜も更けて冷えてきた。自殺かタロットをめくるか、どちらか選べ。』

『……タ、タロットを。』

フォルネの言葉に、イルは持っていたタロットカードをピアノコに渡してよく混ぜさせ、裏向きのままフォルネの前に広げた。

数瞬間があつたが、決心したようにフォルネが1枚のカードを引いて、他の者にも見える様に表へと向ける。描かれていた図柄は、

大きな鎌を持った骸骨。大アルカナ13番目のカード“Death”、つまり“死神”のカードだ。カードを見たイルは、溜息をついた。

「そなたには残念な結果だ。私にとっては、運が良かったのかもしれないが。」

「え？」

「このカードにあたる薬は、先日私自身が毒薬として調合した物だが、まだ誰にも試した事のない薬でな、どのような効果が現れるのかは私にも分からぬ。」

フォルネの顔がみるみる蒼白になっていく。イルの言葉を信じるのなら、この小瓶に入った1、2ミリリットルで死んでしまうか、気分が悪くなるだけで死に至らないのかは分からない。ただ、組織の関係者の噂では、イルが調合した薬はたった1滴で絶大な効果を発揮するが、彼の調合した毒薬は同じ様にたった1滴で人だけでなく悪魔まで死に至らしめると言われている。

「さて、ここでもう一度選択権をやらう。自殺か、自身で選んだ薬をあおるか。」

イルが何を言ったとしても、フォルネにとっては死刑宣告と同じ。絶望したように俯き、肩を落とすフォルネ。それを何の感情も表さず他の3人は眺めていたが、1番遠い所にいた橘は、フォルネが肩をかすかに震えさせたのを見て泣いているのかとも思った。しかし、次に微かに聞こえてきた笑い声に不信な顔を向けると、今まで影になつて見えなかったが、フォルネの手が懐へと伸ばされ何かを掴み出そうとしている。それに気付いた橘とビアンコは、素早くイルを庇う位置へと進み出る。そのままフォルネから離れるようにイルを誘導しようとするが、イルは片手を挙げてそれを制止し、そのままフォルネを見下ろして彼の返答を待ち続ける。

「……なぜ……だ。なぜ、私が貴様の命を聞かねばならんのだ！」

「何故」と聞くか？ 答えを知っている筈のそなたにあえて答えてやるなら、それが貴様らの先祖から続く制約、私との契約の結果だからだ。知っているだろう？」

フォルネの上辺だけの敬いが消えた言葉にも、イルは全く感情を表さずに淡々と言葉を返す。その様子にフォルネの感情が暴発し、懐に忍ばせていた拳銃を引き抜き絶叫した。

「なぜ、なぜ、自身の失敗で大切な物を奪われた貴様に、私が命令され、命を握られねばならんのだ！」

フォルネの絶叫の余韻が消えない内に、橘が4日前に車内で感じた以上の冷気と闇が一瞬でこの場にいる全員を包み込み圧迫した。そして、いつの間にか橘とビアンコの前、フォルネのすぐ眼前に背後にいたはずのイルが立っている。

「……貴様に、それを言う権利はない。その事で私を責めて良いのは彼女と神だけだ。何より、私の唯一の失敗となったあれは、貴様ら教会側が本当の神の言葉と信じずに彼女の言葉も聞こうとせ

ず、彼女の命を奪い、聖職者でありながら悪魔を召喚し、その悪魔の力によって私を罠にはめ、彼女に与えられた力を奪った拳句が、その力を悪用しようとした者に奪われてしまった貴様らの先祖の失態でもある！確かに、私にも非がある事は認めよう。しかし、真実を知った後、盗まれた物を私自ら探しに行こうとしたのに、契約によって私を組織に縛り付ける事で事実を揉消そうとし、私の庇護を受け、力を借りて存続を続けてきた者達の血を引く貴様に、私を責める権利は無い！組織上層部にいる者にとって忘れてはならぬ過去を忘れ、制約を捻じ曲げ、私に対して暴言を吐いた罪、本来なら死をもって償わせる物だが、貴様に彼女のように死と言う安寧を与え、る事はせぬ！この罪、永劫続く闇の中で償え！」

イルが纏っていた外套が文字通り闇に溶け消え、代わりに彼の背には右側3枚は漆黒、左側3枚は純白という合計6枚の翼が現れる。ここでミカエルのように、半分が漆黒ではなく全てが純白の翼を持ち、頭上に金色に輝く輪でもあれば、宗教画に描かれる上級天使そのものであっただろうが、頭上に黄金の輪ではなく、額に縦向きの第三の眼と呼ばれる物が現れた。その姿は左3枚の羽が純白という事を除けば、ルシファーと同じ堕天使と言えるが、彼が纏っているのは禍々しい気配を放つ第三の眼以外は天使のような聖に属する物だった。その負の気配を放つ眼が開かれると共に、今まで開けられない事の無かった両目が開かれると、そこには血のように赤い瞳がフォルネを写していた。

その瞳に写されたフォルネは小さな悲鳴を上げた後、ゆっくりと身体を前方へと傾け口から泡を吹いて気絶した。フォルネが動かなくなつてすぐに、何もなかったように周囲の空気は元に戻る。

この周囲の変化にピアノコと橋は息を詰めて動けずにいたが、全てが終わったと感じると、同時に大きな溜息をついた。それを元の黒い外套を羽織り、両目を閉じて第三の眼と6枚の羽も消え、いつもの静かな空気を纏ったイルが、可笑しそうに元の位置で眺めている。

「ちょっと伯爵、その力使うなら言つてよ。いくら伯爵の意思で対象者が制限されるつて言つても、こつちには心の準備つてもんがい
るんだからさあ。」

「白鳳、“伯爵”ではなく“公爵”。それと、敬語！」

ラテン語から母国語の日本語にし、溜口でイルに話しかけるピアンコに、素早く橋が不機嫌な声で叱責を飛ばす。

「構わん。ピアンコの話しやすい話し方で、と言つたのは私自身だ。それに、10年以上その口調で話されていたのに、急に敬語にされては気味が悪い。」

イルの言葉にさらに何か言おうとしていた橋は口を閉ざし、ピアンコは何がおかしいのかわらなく笑いながら、言いたい事を我慢する事によって引きつっている橋の頬を横からつつく。眉間にしわを寄せつつもイルの手前しばらく我慢していた橋だったが、彼ら兄弟が顔を合わせると必ずと言つていいほど始まる一方的な口論、ここが気に入らないといういろいろ列挙するが、横から聞いていると相手の事を自分の事のように自慢しているとしか聞こえない橋の言葉と、その言葉を聞いているのか聞いていないのか不明の笑みを浮かべて、橋にちよっかいを出し続けるピアンコという、全く両者の言葉と行動が噛み合っていない後景が展開された。イルはその不毛なじゃれあいを止めようとはせず、ただ月を見上げていつものように彼らが、特に橋の方が力尽きるまで待っていた。

現在（1）：真実

法王庁地下の一室

「補佐官は、わ、私の、甥は、どうなるのでしょうか？」

法王庁に出入りする者の中でも、カトリックだけでなく全キリスト教会の裏組織に所属する者しか立ち入れない一画。その中でも部屋の主に許可をもらった者しか入る事が出来ないイルの執務室兼私室は、地下3階奥にある極秘の書庫のさらに奥にあった。地下にありながら、イルの力によつて雨の日でも彼の気分しだいで太陽の光が天井から差し込む部屋に、今は老人の怯えた声が反響している。

「この先いつまであの闇の中にいるかは、あの者の精神力と態度によつて変わる。つまりは、場合によつては先に寿命が来ても自業自得。」

日本に行つていた間に溜まつた書類に目を通し、署名や決済のはんこを淡々と捺し続けながら、現法王である老人に目も向けずにイルは言葉を返す。

「そ、そんな！」

「私の決定が不服か？法王。」

イルの気迫に飲まれた老人、法王は何も言えなくなつてしまい、震える足でよろよろと部屋を出て行つた。

「あーあ、先輩は本当に優しいんだから。」

法王がいようがいまいが関係なく、応接用のソファで足を投げ出して黒いビンの中身を飲んでいたルシファーが、法王がこの階から去つた事を気配で確かめてから口を開いた。

「何がだ？」

今日の分を含め溜まつていた仕事を全て片付け、整えた書類を力の上階の職員に送つてから返されたイルの言葉に、ルシファーの向かいに座つてチェスの相手をしていたピアノコが答える。

「違反者は規定通りに罰せられ、さらに自殺を選ばない場合は、武官も文官も関係なく組織の軍部に引き渡され死ぬまで最前線へと送られる。そうになると、50歳を過ぎた根っからの文官であるあの男じゃ普通の訓練だけでくたばっちまう。それを、伯爵が自身の手で精神的な罰を与える事でそれ以外の罰を禁じたから、あの男はとりあえず寿命で死ぬことが出来るって事が言いたいんだろ、ルシファ―？まあ、あんなジジイは軍部を統括してるオレとしてもお断りだっただけ。」

「それともう一つ、シャサムのその後の処置。」

「そういや、あいつどうなんの？」

熟考の末、クイーンの駒を動かしたビアンコの言葉に、今度は部屋の隅で飲み物を選んでいたイルが答える。

「中天の牢にある“氷獄の森”を生きて出れば放免。守り役であるアスタロトはそのままシャサムに付き、助言とどうしてもという時だけ力を貸すことを許した。」

「氷獄の森？」

片手に持っていたルシファ―と同じ黒いビンの中身を直接あおり自分の番を待つビアンコの問いに、先程のビアンコと同じように熟考してクイーンの駒を手を取ったルシファ―がこの世には存在しない森について説明する。

「氷獄の森は魔界でも手が付けられないほど凶暴な魔物がいる事や、悪魔が違反して殺した人間の怨念が渦巻いている事で有名。本来は魔界として作られたんだが、何をどう間違ったのかその魔物達は自分の力を制御出来なくて魔力が渦巻く危険な地になっただけでなく、天界や人界にも影響を出すようになった。ああ、先輩が今回持っていた毒薬“氷獄の鎖”はこの森に唯一流れている川の水で、この森の影響を受けているせいか森の魔物達以外には猛毒なんだ。」

とまあ、それは置いといて、作った本人はいったんその世界を次元ごと隔離して今の魔界を作り直し、ちょうど違反者への罰になって良いかもしれないと思って、違反者や禁忌を犯した天使や悪魔を

投獄する中天の牢の中にその森へつながる門を作ったんだ。もちろん、他へは影響が無いように調整してからだけど。何が起っても自分で責任を持つなら出入りは自由だから、よく無謀な悪魔や天使がスキルアップのための修行に使うんだが、あそこの魔物は管理者の付き添い無しで入った者を見境無く襲う奴らで、管理者になる前の先輩以外にはほぼ無傷で帰ってこれたのは魔界では俺を含めた七大侯爵、天界では今の四大天使と墮天前の俺くらいかな。無傷じゃなくともとりあえず帰ってこれたのは、魔界では今回守り役に付けられたアスタロトだけで、そのアスタロトはシャサム教育係を務めた事もあったから、懐いてくるシャサムにとっても甘い。その甘さが今回の事を引き起こした一端でもあるから、氷獄の森はアスタロトにとっても良い罰になるけど、あいつが付いてるって事はちゃっかりスキルアップしてシャサムは中天の牢から出てくるって事。とりあえず、アスタロトが氷獄の森に挑戦したのは、ベルゼの配下になる前の話で今より弱い時だから、よっぽどの間違いがない限り、たとえ自分が殺した人間の怨念に追いかけれようとシャサムが死ぬ事は無いね。」

「なんだか人間側としては複雑だが、それは楽しみだ。しかし、ホント伯爵は優しいよね。今回持つて行ってたコレクションには、あの男が引いた薬を含めて、“氷獄の鎖”以外は命を落とすほど強力なのは無かったんでしょ？最初から命を奪うつもりは無かったとは言え、あの男が自殺を選んでたらどうしたのさ？」

「軍部での強制兵役を入れず自殺を選択肢に入れたからといって、あの男には自殺を選ぶ事は出来ない。」

「何でさ？」

「またもや熟考に入ったビアンコの代わりに、ルシファーが問いかける。」

「奴は、いくら墮落していたと言ってもキリスト教の聖職者。キリスト教は自殺を許していない。」

「そんな事で？」

「一部を除いた一般信者でも最近では信じている者はほとんどいないが、奴はお前やミカエルを実際に見て、天界や魔界の存在を視認出来ていたからな。自殺者の死後と言うのを、妄信していた。」

「ふーん、そんな事未だに信じてるんだ。悪魔と契約した奴や、悪魔に命取られた奴は確かにほとんどが魔界行きになるけど、自殺者や悪魔に命取られても例外で天界に行ける奴はいんのに。」

「そうなの？」

「ばかばかしいといった思いを言葉だけでなく態度に出すルシファに、ナイトの駒を動かしながらビアンコが尋ねる。」

「俺達が決めた制約では、悪魔が契約以外で魂を狩り取れるのは、天界に行ってもすぐに転生できないほど罪を犯した奴だけって決まってるんだ。でも、今回シャサムがやったように悪魔の私情のために死ぬ奴がいる。そういう奴らは、魔界に連れてこられても天界の奴らが引き取りに来るのさ。まあ、天界の奴らが来る前にどっかで迷ったりして魂が消耗したら、下級悪魔として生まれ変わっちゃうけど。」

「へー。それで自殺者は？」

「自殺者の魂は、数世紀前まで確かに全て魔界へと連れて行かれたが、今では自殺者が多すぎて魔界では対処しきれないため、他人を巻き込んだの自殺でなければとりあえず天界で天使へと生まれ変わり転生できるようになった。それでもその業を背負って生きていかねばならぬから、私には決して良い事だとは思えんがな。」

テーブルの上に紅茶の入ったポットとティーカップを置き、ルシファールとビアンコが座るコの字型ソファールの一人掛けの所に座ったイルが、キリスト教の教えを真つ向から否定するような事を次々と口にする。しかし、キリスト教会の裏組織に属するビアンコは全く気にする様子はないし、本来その事実を隠す側にいるはずのルシファールも何も言わずイルと同じように秘密を口にする。

「でも、良いの？オレにそんな話をして。一応、オレはキリスト教関係の組織に身を置く人間だよ？」

「別に構わないさ。お前がこの組織、 “ S w o r d o f S a i n t ” に身を置くのは、お前達2人を拾い育てたと言う、感じなくていい恩を私に感じ、就いた職がたまたまこの組織の軍部だっただけで、別にキリスト教徒でもないし、キリスト教に興味があるわけではなからう？」

一応守秘義務などを気にしたビアンコがイルに問うと、彼は何でもない事のようにビアンコの組織に身を置く理由を返答とする。それでもビアンコが気にするそぶりを見せると、ルシファーがナイトの駒を掴みながら口を開いた。

「気にすんなって。法王の奴がいなくなっただけからは誰に聞かれても大丈夫なように、ココで一般的に使われるラテン語じゃなくて、ココじゃお前と副官くらいしか分からない日本語にしてるんだし。何より今の時代、宗教は政治の道具じゃなくなり、人それぞれの精神のために存在するモノになった。今俺達が話した事から新しいキリスト教の宗派が出来ようと、その教えが森羅万象の理や事実から完全に逸脱さえしなければ、世界の均衡に何の問題も生じないし戦争にもならない。それに、この世には数多の宗教や信仰が存在し、その数だけ神や死後の世界やらも存在してる。」

駒を動かし終えたルシファーは1度言葉を切り、新しく取り出したビンの中身を一口飲んでから続きを話し出す。

「死後の人間の魂の行方の話として、エジプトの神話の中に死後の魂は冥界審判で善悪を測られ、良い魂は“死者の楽園”で第2の人生を歩み、悪い魂は怪物に喰われると言う話がある。この神話の話にキリスト教の話と仏教の話が合わさって、例えば冥界審判で良い魂と裁定された魂は“極楽浄土”へ渡り転生し、悪い魂は悪魔によって魔界へと連れて行かれて魔物に変わる、と言う教えを説く宗教が出来てもそれもまた“真なり”だ。実際に俺の見た事として、あるキリスト教徒は生まれてからずっと神の加護を受けていたが、結婚して仏教に帰依したら死んでから八大地獄に落ちたって話もある。

「つまり端的に言ってしまうえば、死後の魂の行方も生きている間の加護も、その時信じている神によって違うと言つ事だ。」

ルシファアの例え話と経験をイルが簡単な言葉で締めると、ビアンコが納得したような顔でうなずいてから「じゃあさ、」ときり出した。

「オレみたいに特定の宗教を信仰してない奴はどうなんの？」

「その者が一番関わった宗教、だな。お前の場合はキリスト教になる。実際、先日嵐の日に明らかにお前に落ちると思われた雷が、途中で進路を変えて少し離れた樹に落ちた事が有っただろう。あれはお前の事を気に入った神が、お前を助けるために力を使ったからだ。」

イルの話した真実にビアンコは目を剥くが、この後さらに驚きの事実がイルの口から出てくるとは思っていなかった。

現在(2)：怒り

「これは秘密だったが、お前と橋には神だけでなく、ミカエルを始めとしたラファエル・ウリエル・ガブリエルの四大天使、そしてこのルシフェルを始めとしたリヴァイアタン・サタン・ベルフェゴール・マモン・ベルゼブブ・アスモデウスの七大侯爵の加護が付いている。悪魔である七大侯爵の加護が良いか悪いかは、お前達の気持ちしただが。どの宗教を信仰していたとしても、誰の加護をどれだけ受けられるかはその者しただ。」

「え？何でアイツだけじゃなくて、オレにもそんなに加護が付いてんのさ？」

さらに目を大きくして驚きを表したビアンコに、その言葉の真意を正確に読み取ったルシファアが答えを与える。

「そういう所が、俺だけでなく他の侯爵達や神、四大天使に気に入られてるのさ。」

「そういう所って何さ？」

「つまり、その性格さ。」

「？」

ビアンコはそれでも分からなかったのか、しばらく眉間に皺を寄せて考え込んでいたが早々に考える事を放棄し、ある事を思いついて口の端を上げながらイルへと目を向けた。

「ところで伯爵、伯爵の加護はオレとアイツに付いてるの？」

「……さあ、どうだろうな。」

少し間を空けてからどちらでもない答えをイルは返したが、ビアンコの言葉に一瞬カップを持ち上げようとしていたイルの腕が止まった事で、付き合いの長いビアンコとルシファアには彼がどちらを選択したのか理解できた。そして、もしその事を指摘した時の心情も想像出来る2人は、顔をチェス板に向けたままで同じように顔をニヤつかせた。

「……ルシフェル、今回は何の酒を持って来たのだ？」

2人の表情を、いつものように目を閉じたままでも感じ取ったイルは、明らかに話を逸らそうとした感じで口を開く。それに今度は苦笑を浮かべてルシファーが答える。

「俺が自分で作った果実酒。水は“氷獄の鎖”。」

「……ルシファー、今“氷獄の鎖”って言ったか？」

ピアノコはキングの駒を動かしつつ、ルシファーの言葉に含まれていた単語を繰り返して、「あれ、耳おかしくなったかな？」と耳に指を入れたり、頭を傾けて水を抜いたりするような動作をする。それに、イルは何事もなかったかのように優雅に紅茶を飲み続け、ルシファーはまたもや同じようにキングの駒を持って楽しそうに笑う。

「大丈夫だつて。ちゃんと毒素は抜いて、ただの酒造りに適した水に蒸留してあるから。」

「なら、良かった。」

「……ただ、甘味のためにトリカブトが入ってるけど。」

「……つめえ、ルシファーッ!!」

安心して残りを飲み始めたピアノコを見てから、顔を背けて相手に聞こえないように小さな声で呟いたルシファーの一言は、しつかりと耳に届いていたようだ。言葉が耳に入りその意味を理解したとたん、ピアノコは彼の胸倉を掴み上げて揺さぶっていた。

「あつはつはつは、冗談だつて。いくらお前がトリカブトに耐性を持つてるバジリスクだからって、俺もそこまで酷くねえつて。ちゃんと毒性分は抜いてるから、大丈夫。」

グラグラと揺さぶられながらも、どこか楽しそうに笑い語尾に音符でもつきそうな声で真実を告げるルシファー。その様子に、揺さぶっていた手を止めて「ああ、そうだ、そういう奴だった……。」と疲れたようにピアノコは脱力して肩を落とした。そして、座りなおそうと乗り出していた身を引いたところで、ピアノコは気付いてしまった。

「あー！チエスがつつ！」

「あーあ。」

絶叫したピアノコと、どこか面白そうに溜息をついたルシファアの視線の先には、先ほどピアノコがルシファアに掴みかかる為に乗りに上げた右足とテーブルの間で、無残にも踏み潰されて壊れてしまったイルの私物であるガラス製のチエスセットだった。ピアノコの絶叫で優雅に紅茶を飲んでいたイルの関心もそちらへと向き、3人はしばし無言になり部屋も時が止まったように静寂に包まれる。

「残念だったね、ピアノコが勝つたのに。」

「そりゃ、オレが動かしたのと全く同じようにお前も動かしてたら、嫌でも勝てる。てか、そんな事しなくても、お前弱すぎ。今日オレが勝つてたら、オレの500戦500勝じゃねえ……。」

カチャン

静寂を破つたルシファアとピアノコの会話が、茶器がテーブルの上に置かれた音で遮られる。その音から次の音が鳴りだすまできっかり5分。その間に、部屋の下側では何も変化はなかったのだが、たった1ヶ所、天井で大きな変化が現れ出した。先ほどまで、冬の澄んだ空気の中、暖かい日光が降り注ぐ快晴の空模様が広がっていた天井に、次第に今にも雨粒が落ちてきそうな黒い雲が広がり始め、隙間では稲光が走っているように見える。そして全体に雲が満遍なく広がったところで、何の前触れもなく大きな音を伴って1つの雷が落ちた。それがきつかけとなったように、雨とともに幾条もの雷が落ちる空模様が天井いっぱいに広がった。少し前に言ったように、この部屋の天井に写される空模様は主であるイルの気分しだい。そして今現在の空模様は、この部屋に幾度となく足を踏み入れているピアノコとルシファアでさえ見覚えの無いほど荒れている。

天井が嵐の時のように荒れている中、不意にゆらりとイルが立ち上がった。ピアノコとルシファアは、壊れたブリキの玩具のように音が聞こえそうなほどゆっくりとそちらに顔を向け、さっきの部屋を出る時の法王以上に顔を青ざめさせてイルの次の行動を待つ。

「……ルシフェル。」

「な、何？先輩?!」

「今すぐ、このチェスセットを修復してこい。どんな手を使っても良い、“些細な傷まで全て元通りに”だ。」

「りよ、了解っ!」

「……ピアノコ。」

「な、何でしょう?!」

「今度の公務による日本行きの時、そなたを護衛責任者として指名していたが、それはそなたの副官に変更し、代わりに彼女の分も含め一週間分の仕事を“1人”で“全て”行う事。もちろん、その間は前線への出勤を禁ずる。」

「イ、イエッサーッ!」

「……それと、2人とも。」

「「ま、まだ、何かっ?!」」

「しばらくの間、ここへの出入りを禁ずる。……今スグ消工口。」

第三の目は現れなかったが、両目を開き、その血のように紅い瞳で鋭く睨んでイルが告げた最後の言葉に、2人は先を争うようにこの部屋唯一の出口に向かって走り出し、そのままイルの視界から消えた。そのまましばらく動かずに扉に目を向けていたイルは、ゆっくりと目を閉じ、併せるようにもとのソファに座りなおして紅茶の入ったままのカップに口を付けた。それからは何事もなく、静かな時間が流れる。

いつの間にか天井の雷鳴はやみ、写し出される空模様は幾分かマシになっている。しかし、ルシファーが言いつけ通りに些細な傷まで元に戻したチェスセットを、ピアノコが用意したと思われるイルの好きな銘柄の紅茶葉と茶菓子と共に、イルと面識がありイルに気に入られているルシファー直属の部下によって彼の所へ届けさせてから数日が過ぎるまで、その空模様は彼が不機嫌な時や不調な時によく見られる、どんよりとした曇り空だった事は、部屋の主である

イルしか知らない事だった。

？日前：閑話（2）（前書き）

あの人が初めてイルの部屋を訪れた時の話。
今回も会話文のみです。

彼が激怒した理由とは？

? 日前：閑話(2)

『うっわ、すげえ。伯爵の部屋ってこうなってるんだ。』

『ああ、そっか。ピアノコは入るの初めてだっけ。』

『そうなんだよ。てか、何で地下3階なのに空が見えんのさ。』

『先輩の力で天井に投影されてんの。力が強いからさ、映像じゃなく本物にしか見えねえんだよ。』

『へえ。』

『ああ、そうだ。この空さ、先輩の体調とか機嫌の良し悪しのバロメータみたいなモンだから、曇り空とか雨降ってる時は気を付けるよ。』

『どういう事?』

『どうも、先輩の気分の影響を受けてるみたいで、先輩がこの部屋にいる時だけみたいだけど、体調が悪かったり機嫌が悪いと天気が荒れるんだ。』

『そうなんだ。因みに、ルシファーは荒れてるの見た事あんの?』

『1回だけな。何代か前の法王がバカやって先輩を怒らせてさ、たまたまそこに俺も居合わせたんだ。』

『バカつて、何やったの?』

『それは……』

『……私が目を話した際にそこに置いてあるガラスのチェスセットを落としかけて、粉々にされかけた。』

『ウワァ!は、伯爵!真後ろからいきなり出てこないでよ!』

『気配で気付いていたくせに、大げさだな。』

『……良いじゃん、別に。一般人装っても。今ここにいる中でたった一人普通の生き物なんだから。』

『普通の生き物……ギヤハハツ。やっぱお前おもしれえ。』

『……ハア、まあ良い。私は少し上に行ってくる。好きにして良いが、物は壊すな。』

『はいはい、行ってらっしゃーい。……ルシファー、伯爵に
つてあのチェスセットってそんなに大事なの？』

『ああ、大事も大事。ここにある物で先輩の私物って言うのはチ
エスセットと飲み物だけ。他の家具とかは組織がそろえた物だし、
服とか日用品、大量の本は頼まれた俺達が先輩の好みに合わせてそ
ろえたか、ベルゼとかアス達みたいに先輩の事慕ってる奴らが貢い
だ物だからな。』

『ふーん。でも、何でそんなにあのチェスセット大事にしてんだろ
？別に高価な物ってわけでもなさそうだし。まあ、結構古そうな物
だから、アンティークとしては価値が有るかもしれないけど。』

『確かに、500年以上前に当時は有名だった細工師が作ったものだ
からそれなりの価値は有るが、先輩があれを大事にしているのは、例
の“彼女”からの最初で最後の贈り物だからさ。』

『ああ、仕事とは言え、伯爵が唯一契約したって言う例の……。
なるほどね。』

『そう言う事。まあ、壊しさえしなければ普通にチェスをするのに
使っても文句は言われないよ。』

『そっか。じゃあさルシファー、一戦交えねえか。』

『良いねえ。七大侯爵の間じゃ負け無しの俺に勝負を挑むか。受け
て立ってやろうじゃねえか。負けても泣くなよ。』

『言ってくれるじゃねえか。ルシファーが負けたら、俺だけじゃな
くて一番隊の隊員全員に一番旨い酒奢れよ。』

？日前：閑話（2）（後書き）

イルの中ではルシファー達は“彼女”と同等の特別な存在ですが、周りにいる者達からは“彼女”はその中でも色々な意味で特別な存在として捉えられています。

因みに、この後ルシファーはピアノコにボロ負けします。他の6人の七大侯爵はいらぬお節介でわざと負けてあげていると言っ、ルシファー本人も知らない裏話。

1年後(1)：橘

イルの執務室兼私室

「これが、君が聞きたいと言った、君の事を組織が見つける前に有った、私の探しモノに関しての出来事だ。ちょうど、1年前だ。」
今この部屋には、主であるイルの他に、ソファーに向かい合うように座る1人の少女しかいない。

「聞いても良い？あなたが元法王補佐官の、えーと……」

「フォルネ・リカルドか？」

「そう、そのフォルネ・リカルドに与えた罰ってどんな物なの？」
「ルシフェル達は“精神の回廊”と呼んでいる。延々と終わりなく続く回廊の壁に、自分の生まれてからの日々が繰り返し映し出され、その回廊を立ち止まる事なく歩き続けなければならないと言う“夢”だ。立ち止まれば、自分の行いによって被害を被った者の形をした影がそちらの世界へ引き込まうと追いかけてくる“夢”が休む事無く続く。終わりは、人によって違う。これ以上の説明は難しい。どうしても知りたければ、お勧めはできないが、体験させてやる事は出来る。」

「謹んで遠慮します。」

「だろうな。……他に聞きたい事は？」

「なぜ、会った事もないのに、神野 朝霞があなたの探し人じゃないと分かったの？」

「勘違いしているようだが、私が探しているのは“人”ではない、

“モノ”だ。」

「じゃあ、どうして神野 朝霞があなたの探し“モノ”を持っていないと分かったの？」

「神野 朝霞が違うと分かったのは橘の情報からだ。私の探しモノの目印は、持ち主の“右の掌”ではなく“左手の甲”に現れる。形

は“Sword of Saint”の紋章と似た、6枚の翼を背にした逆十字だ。』

『その、探し“モノ”って何?』

無表情のまま淡々と答えていたイルの口が少女の問いで一瞬止まり、しばらくして再び口が開かれた時、その目元には慈愛のようなものが浮かび柔らかくなっていた。

『……私がこの世に誕生してから唯一契約した相手に、神が世界を救うために与えた神の力の一部だ。その力はたった少しいだが、使い方を間違えればこの世界を破壊しかねない。彼女が死んだ時、彼女の魂と共に天に昇り神の元へ自動的に戻るはずだった。一応よくない考えを持つ者から守るために、私が彼女の魂と力を護衛する事になっていった。だが、不覚にも彼女が不当な宗教裁判の結果火刑に処される時、私はこの組織を設立した者達、つまり当時の教会の人間の罫により結界を張られ動けなくなり、その間に力はまた別の組織の者に奪われてしまった。その後、その組織と教会の間で奪い合いとなり、その混乱の中でソレは行方不明となった。幸いにも力と共に有るはずの彼女の魂は、ミカエル達が寸前で保護してくれたおかげで傷つく事なく天へ召されたが、あの時ほど私が後悔した事も、憤怒した事も、跡形なく消滅したいと願った事はない。』

自愛に柔らかくなっていた目元が、言葉の途中からどんどん険しくなっていたが、一瞬の沈黙の間にすぐに元の無表情に戻る。

『……次は?』

『……今の話に出てきた人達について詳しく聞いても?』

1年前と変わらず、目をぴったりと閉じたままイルが尋ねると、しばらく考えていた少女がゆっくりと聞き返す。それにイルが了承を示し、『誰からがいい?』と聞く。

『あなたの世話係だと言う、“橘さん”。』

『橘。本名は橘 赤凰、当時21歳。私がアジアを訪れる時は、全ての世話をする日本支部所属の男。アジアにある関係施設に所属する者の中で私の身内としてはトップにいるため、アジア内の私の身

内に対する連絡役も行っている。組織としては日本支部のトップとして司教の位を与えられているが、本部であるここでは一つ下の司祭と同等の扱いになる。それでも20歳で司祭にまでなる者は組織設立以来5人にも満たない。組織の中には私の後盾により、実力もないのにその地位に就いたと噂する者もいるが、あの地位は確かに橋本人の実力で勝ち取ったものだ。知識については現法王以上、武道については元々素質が有ったのか軍部の精鋭にも引けを取らないほどだ。私やルシフェル、ピアンコが直接指導したのだから、それ位出来てもらわねば困るが……。その何者にも曲げられる事のない心の強さが気高く強い者を好む七大侯爵達に、どこまでも自分に敵しく上を目指し曲がった事を嫌う所が清廉潔白を重んじる四大天使達に気にいられている。まあ、実際の橋はピアンコやルシフェルによって遊ばれ、ミカエル達と一緒に胃を傷めている日々らしいが。」

始め履歴書か何かを淡々と読み上げるような口調だったイルだが、最後の方の自分の視点から見た橋を語る時には口調も目元も再び柔らかくなっていった。

『橋については、これくらいだ。』

1年後(2)：白

『次は誰だ？』

『“ピアンコ”と言う人は？』

『ピアンコ。本名は橘 白鳳、はくほう当時24歳。』

『その名前、もしかして……。』

『ああ、奴は橘の実の“姉”だ。』

『姉?! 女性なの?!』

事実を知った少女の驚いた声に、イルは初めてククツと楽しそうに喉の奥で笑い、その無表情だった口の端を歪める。

『組織の中でも、同期と一部の近い者しか知らない事だ。確か、法王も知らないはず。アレの副官から聞いた話によると、アレが男のふりをしているのは、入隊当時、軍部と言うある意味体力勝負の世界において女と言うだけでなめられて嫌気がさしていた時に、上官であり士官学校で仲の良い先輩だった男からのアドバイスを間違っ
って解釈した結果、だそうだ。とりあえず、ピアンコこと橘 白鳳はこの全キリスト教会の裏組織“*Word of Saint*”軍部において、精鋭のみで構成された特殊部隊“白の一番隊”の隊長。一般の軍隊ではトップの階級は元帥などだが、この組織では大佐が一番上だ。そしてこの組織の中で大佐の階級を持つ者は、ピアンコとその副官を含め8人いる。そして話の中でも出てきたが、階級としては他の7人と同列の扱いだが、軍部の命令系統としてならピアンコは軍部のトップ、総責任者だ。』

『その“ピアンコ”と言うのは、あだ名か何か？』

『ピアンコのみなら“あだ名”と言えなくもないが、正確には違う。この軍部は仕事内容で7部隊に分けられているが、その7つの部隊一つ一つに色が与えられている。情報収集などを行う通信隊は黄色、軍医や衛生兵が所属する医療隊は緑、一般に言う陸軍にあたる歩兵隊は灰、空軍にあたる航空隊は紫、海軍にあたる水軍隊は青、

装備の開発などを行う工兵隊は茶、そしてビアンコの所の人外のモノの相手や特殊任務を行う事を前提として編成された特殊部隊は白、この7つだ。ただし、公式の部隊としてはこの7部隊のみだが、1つだけ隊長以外の所属隊員は大佐以外には秘密にされている部隊がある。その部隊は、軍部の規律を取り締まる憲兵隊で色は黒。今の隊長はビアンコの副官だ。この計8部隊をまとめる各隊長は8人の大佐は、その担当している部隊の色で呼ばれる。だから特殊部隊、白の部隊の隊長である橘 白鳳は“ビアンコ”と呼ばれる。」

『“ビアンコ”って、イタリア語よね？しかも、男性形。』
『良く知っているな。』

『英日ハーフだから、英語と日本語は当然として、今使ってるラテン語にイタリア語、フランス語、中国語、他にも色々使えるわよ。』
『何故、そんなに？』
『趣味。』

たった一言で簡潔に答えた少女の言葉に、少しの間を空けてからイルは先ほどと同じように楽しそうに口の端を歪めて喉の奥で笑った。

『……久しぶりに、アイツの気に入りそうな者が現れたな。』
『アイツって？』

『そのうち、向こうから会いに来るだろうから、秘密だ。』
『ケチ。』

『ククク……今名前を出せば、アイツは呼ばずとも出てくるだろうが、そうすると今以上に話が脱線し続けるのでな。待てないと言うなら、話が全て終わったところですからすぐに呼ぼう。それより話を戻すが……女性でありながら“ビアンコ”と呼ばれるようになったのは、さっき言っていたアレにアドバイスをした上官が、“白鳳”と言う名から白を意味するイタリア語、それもアレが男として振る舞い始めた事から女性形の“ビアンカ”ではなく男性形の“ビアンコ”をあだ名として呼び始めた事かららしい。詳細は省くが、それから巡り巡って軍部において各部隊の隊長はコードネームとし

て色の名を与えられる決まりができた時、当時すでに大佐の地位についていたビアンコはそのまま“ビアンコ”と言うコードネームで呼ばれる事となった。』

ふと、イルが口をつぐむ。少女が不思議に思いながらも黙っていると、彼は珍しく盛大な溜息をつけてから再び口を開いた。

『ただ、この各部隊を現す色やコードネームの決定権は総責任者に有つてな、つまり今はビアンコに決定権が有るという事だが、アレはこういう事に関してはフィリングで決めようとする。その結果、自分はそのままたリア語の“ビアンコ”で率いる部隊の色は“白”、黒の部隊は影で動くような部隊で黒っぽいからと色は“黒”とし、隊長である副官が中国人だからと言う理由だけでコードネームは中国語で黒を表す“ヘイ”だそうだ。その他には……』

盛大な溜息の次は、眉をしかめて苦い顔をすると言う、普段のイルでは見られない表情を次々とする。いつもの彼を知っているビアンコやルシファー達がいれば大笑いするか絶句しているかもしれないが、今日が初対面の少女はいつもの彼を知らないの、先ほどから少しずつ変わる表情に何も触れようとしない。そのおかげとも言うべきなのか、イルは自分の表情の変化に気付かず、明らかに不機嫌だと言う顔で押し黙ってしまった。

『どうかしたの？』

『ビアンコがトップになり部隊長などの異動などと同時に各部隊の色を発表した時に、アイツは面白そうだからと私にも色を付けた。』

『どんな？』

『“ロツソ”。そう言ったのは、あいつで2人目だ。』

『イタリア語で“赤”ね。でも、何で赤？』

『私もそう思い問いたしたら、“理由は秘密”と言われた。ビアンコの前に、私の事をそう言った者にも。』

『そう。……でも、何となく分かる気がする。』

『？』

今度は疑問の表情を浮かべたイルに、少女はフフツツと楽しそう

に笑う。

『それで、説明の続きは？』

『ああ……ピアノコは、軍部のトップに立っているだけあつてこの軍部内では勝てる者はいない。私は本気で手合わせをした事が無いため分からんが、ルシファーを始めとした七大侯爵とミカエルを始めとした四大天使と互角にやりあえるほど強い。この“強さ”については、腕力はもちろん知力においてもと言う意味だ。ルシファーに並ぶほどの自由奔放さで楽しい事が好きな七大侯爵達にそれでいて事態を見分け状況に応じてすぐさま行動を起こせる冷静さや判断力で厳格な四大天使達に気にいられている。』

ふと、イルが言葉をとめて少女の顔じつと見るかのように顔をそちらに向けたまま動かなくなった。

『どうかした？』

『……ん……まあ、本人達は居ないが問題ないだろう。』

『何が？』

『橘とピアノコの特異体質、橘が私の世話役をしている理由について。』

『さっきの話の始めの方で有ったわね。でも、本人が居ないのに良いの？』

『別に隠している理由ではないからな。ピアノコの正体よりは、周知の事実だ。信じていない者もいるが、私についての噂よりは知られている事だしな。……さて、“バジリスク”と言うモノを知っているか？』

『バジリスクって、“蛇の王”と言われ、頭に王冠をいただき体内に猛毒を持ち、見ただけで死をもたらすと言われる、ヨーロッパの伝承にある蛇の形をした幻の生き物よね。あと、これは本当か知らないけど、あらゆる毒に耐性を持ち、体内を巡る血は毒薬になるとされる特異体質を持つ人の事を……え？まさか……。』

『そのまさか、だ。さすがに血が毒になる事はないし、全ての毒に』

耐性を持っているわけではないがな。橘は気化する物に、ピアノコは肌に触れたことで吸収される物に、両者ともに人界にない物に対してだけ耐性を持っていない。それでも、私のコレクシヨンの内9割の物に耐性を持つれっきとした“バジリスク”だ。だからこそ、いつ私のコレクシヨンに触る事になるか分からない世話役には何人かいた候補者の中から橘を選び、本来必要は無いのだが、組織との取り決めで外に出る時は必ず連れて行かなければならない護衛官にはピアノコを指名することが多い。……橘とピアノコについては、これくらいか。』

1年後(3) : 天使

『今度は誰だ?』

『ルシ……私はどつちで呼んだ方が良いのかしら?』

少女は次の名を言いかけて、先ほど対象の人物がイルの話の中で2通りの呼び方をされていた事を思い出し、逡巡するように口籠つてから相手に問いかけた。

『本人に聞いた方が早いですが、今呼ぶと少々邪魔な存在だからな。そうだな……』

『そもそも、どうしてあなたは他の人達とは違う呼び名、彼もミカエルも聖書に登場する天使と同一と考えて良いなら、墮天前の彼の呼び名であなたは彼の事を呼ぶの?』

『私達、力のある者にとつては、“名前”とはそれだけで力を持つ。日本で言う“言霊”と言うモノに近いかもしれんな。だから私達は他人に知られても良い対外用の名と共に、口にしただけで意味を持つ“真名”と言う物を生まれた時に付けられる。これは大昔にヨーロッパなどでは人間も行っていた事があるし、日本では幼名と言う物がそれに近い。その真名を、魔力を持ち尚且つ自分より意思の力が強い者に知られると言う事は、名を呼ばただけで命を奪われる事にもなる。それだけ、私達にとって真名は重要なモノなんだが……』

『彼はそれと対外用の名前を同じにしちゃったのね。』

理由が分かり呆れながらも結論を言った少女に、イルは頭が痛いのかこめかみに手をあてながら肯定を表すような溜息をつく。

『それで、私はどちらで呼べばいいのかしら。』

『私は用心のために真名で呼ばないだけで、相手に対して害をなそうと思わなければ真名で呼んでも構わないし、本来ならそなたが真名で呼んでも奴がどうなるわけでもないのだが、そなたはアレを持っているからな、力の差がはっきりするまでは用心のために真名で

は呼ばない方が良さだろう。』

『そう。じゃあ、“ルシフェル”について教えて。』

『一緒に話した方がやりやすいから、ミカエルについても話そう。ルシフェル、正確な年齢は私も忘れたが、ほぼ誕生などについては聖書に書いてある通りなので、2000歳は軽く超えている。ミカエルも同様だ。』

『聖書に書いてある事が事実に近いなら、ルシフェルとミカエルは双子で、ルシフェルは一番神に近いと言われていた天使で、ミカエルは火を象徴する四大天使の1人と捉えていいのね？』

『ああ。だが聖書と違うのは、ルシフェルの墮天の話だ。聖書では神に愛される人間に嫉妬して謀反を起こし、ミカエルとの戦いに敗れた結果、謀反を起こした他の天使達と共に魔界に落ちて悪魔の王になったとされているが、実際はそんな事は起きていない。そもそも、あの2人が本気で戦えば、聖書にあるように世界が荒廃するだけでは収まらない。天界、魔界、人間界、三界全てがこの星ごと消滅する。そんな事になれば、他の宗教の神やら仏が黙っていないしな。』

『じゃあ、何でルシフェルは墮天したの？』

『魔界ができた時に、天界と魔界との橋渡しや後々生まれてくる悪魔達の統率者として、神が強い力を持つ原始の天使達の中から王となる者を選ぶとしたら、奴が立候補した。理由を聞いたら“面白そうだから”と答え、他に候補者もいなかったからそのまま決まっただけだ。因みに、一説ではルシフェル達“七大侯爵”は全員墮天使だと言われているが、本当に墮天使であるのはルシフェルのみ。後の6人は、神に頼まれた私が墮天使の特徴と力を与えてルシフェルの補佐の為に作り出した者達だ。それ以外で墮天使だと言われている悪魔はほぼその通り、天界で罪を犯して墮天された者達だ。中には、話に出てきたアスタロトのように、七大侯爵達のような力の強い悪魔に魅了されて自分から墮天した者もいるが。』

『ふーん。……そう言えば、何故ミカエルはあんなにルシフ

エルの事を嫌っているの？それに、聖書では天使に性別はないって言われているけど、ミカエルがルシフェルの事を“兄”って呼んでたわよね？」

『まず後者だが、確かに神の放つ光から生まれた原始の天使には性別はないが、卵の樹から生まれる最近の天使には性別がある。生殖機能はないが。しかし、原始の天使の中でも特に力が強く、そして珍しい双子であるためか、何かが作用して卵の樹が置かれてからルシフェルは男性、ミカエルの方は言葉遣いはあだが性格からか女性としての特徴が、顔つきや体つきに出てくるようになった。まあ、生まれた時から原始の天使たちは性格などから男性や女性と分けている節があつたがな。そして、ミカエルのルシフェルに対する態度だが、あれはただ拗ねているだけだ。』

『拗ねる？』

『さっきのルシフェルが魔王となつた時の事だが、私や神が一応ミカエルに相談したのかと尋ねたら奴はそれには是と答えた。しかし、実際は独断だつたらしく、ある意味ブラコンなミカエルは拗ねた。そうそう、橘がビアンコにきつく当たる理由の一部も同様の事が原因だ。ビアンコが軍部に入る時、橘には何も告げず、さらには入隊前の1年程は武者修行と称して音信不通になつていたらしい。それで最終的に、礼儀にうるさいミカエルと橘は、ルシフェルとビアンコの仕事以外での上司に対する言動があまりにも許せないものだから、ああ言う態度を取るようになり、それでも直らない態度と妹・弟が可愛くて仕方ない2人からかわれて、両者共に苦労しているらしいな。』

『らしいな、ってあなたはそれを止めないの？』

『今さらあの2人の言動が変わつたら、私としては天変地異の前触れかと思うほどに気持ち悪い。それにミカエルも橘も、長年続いている事だからなくなつたら逆に調子を崩すだろうな。』

ここでイルは新たな紅茶を用意して、説明の態度へと戻つた。

『ルシフェルとミカエルのここでの地位だが、ルシフェルは魔界代

表の、ミカエルは天界代表の枢密院の1人だ。枢密院とは、この“*Word of Saint*”の全てを取り仕切る者達の事で、魔界代表はルシフェルを筆頭とした7名、天界代表はミカエルを筆頭とした7名、人界の文官代表として法王を筆頭とした4名、武官代表としてビアンコを筆頭とした4名、そして私を入れた計23名で構成されている。まあ、魔界代表も天界代表も今の法王達文官代表を嫌っているため、最近ではルシフェルとミカエル以外は全く出席していない状態であるし、私は探しモノに関係する集まり以外は出るつもりがないから、組織を実際に運営していると言えるのは人界代表の枢密院だな。……奴らについて私ができるのはこれくらいだ。もっと知りたければ、本人たちに聞いた方が早いし正確だ。これ以上の事は、物事の規律など普通の事以外ではどうしても私の主観からしか語れぬから、事実とは言えない。』

1年後(4)：イル

『さて、他に聞きたい事は？』

少女の前にも新しい紅茶を置いた所で、イルは次の質問を促した。少女はしばらく考えてから、表情も感情も消した声で口を開いた。

『……私の事は、どこから知ったの？あの事は、今の家族と院のママしか知らないのに。』

『……文字通り風の噂で聞いた後、橘、ピアノコ、ルシフェル、ミカエルの4人に頼んで確認を取った。』

『風の噂って……』

少女は呆れたような苦笑を浮かべるが、イルはいたって真面目な表情を向ける。

『冗談でも何でもなく、さっき言ったように文字通り風の噂、風に宿る精霊たちの噂。』

『精霊……』

『日本には、八百万の神と言う概念があるだろ。全ての物に、どんな些細な物にも神が宿ると言う。あれに似たモノだ。1年前に、橘から詳細を聞く前から私が神野 朝霞と言う候補者が見つかった事、フォルネ・リカルドがその事実を隠し何か画策している事を知ったのも、この精霊達に聞いたからだ。空も陸も海も、この世にある物は全て途切れる事なく繋がっている。その地に根付く宗教の神に頼んでおけば、私の探しモノに関する情報は精霊を通して全て集まる。私と人間との制約で、その場に行って、事の全てを知る者に話を聞かないと、私は手を出す事は出来ないがな。まあ、この事に関しては、たとえキリスト教を敵対視している宗教の神であっても、キリスト教の神に大きな借りがあるからな、地球の反対側で起きた事も1時間で私の所に伝わるくらいには協力的だから、今まで過ちが起きた事はない。』

『借り？』

『神が、彼女に力を与えた時の事だ。あの時、各地で繰り返し起きていた人間同士の戦争の影響で、神が動かなければ世界が滅びの道を辿るような災厄が起ころうとしていた。しかし、他の宗教の神は手をこまねいていたのさ。世界が滅びるほどの災厄に対して、どう動けば良いのか分からずただ見ていただけの神。人間が自分達の行いで招いた事だから自業自得だと、何もせず沈黙して眠りについた神。キリスト教の神と同じように人に自身の力の一部を分ける事を考えたが、最後の最後で迷い実行に踏み切れなくなった神。そんな色々な神がいる中、あの神は彼女に力を与え、災厄を人間自身の手で収められる様に導いた。ちょうど、それが最終段階に入り、彼女無しでも事が運べるようになった所を狙ったかのように、彼女はここの組織の元となった人間達によって宗教裁判にかけられたがな。』

その時の事を思い出したのか、イルが座って手を置いているソファアの肘掛がミシミシと悲鳴を上げる。その微かな音が耳に届いたのか、イルはハツとした様子で手を離してから紅茶を一口飲んで気を落ち着かせた。

『どんな宗教であつても、それを信仰する人間が居なければこの世界から存在ごと消える。つまり、それはその宗教の神の死と言う事。所詮、神も人間が居なければ存在できない、ある意味儂い存在だ。』

まるで自分もそんな存在だと言うように、イルはカップの淵に唇をあてたまま自嘲の笑みを浮かべる。

『キリスト教の神が、力を与えられた彼女が動かなければ、今この世界に存在する全ての神も、魔界も、天界も、地獄も、極楽も、死後の世界も、何もかも存在する事はなかった。人間界とそれぞれの宗教が持つ世界は表裏一体。キリスト教のように人間界の他に、魔界と天界が存在する宗教で、“表裏”と言うのはおかしいかもしれんが。どちらにせよ、他の宗教の神は、キリスト教の神に“1度命を助けられた”と言う“借り”が有る。だから、その神の命で探している私に、各地の神は協力的になる。』

『だから、朝霞姉さんがクリスチャンスクールに通っていただけで、

キリスト教とはほとんど関係ない仏教徒である私の家でしか知られていない事も、あなたの所へ伝わったのね。」

『そう言う事だ。彼女の魂の生まれ変わりであり、私の探しモノを持って生まれ、1年前の中心人物、神野 朝霞の血の繋がらない妹である、神野 麻里明^{まじあ}。』

少女こと神野 麻里亜は、ここに来て初めてイルに名前を呼ばれ、自然と聞かなければならない事は後1つだけだと感じる。麻里亜は自身の両手にはめられた白い指ぬきの皮手袋の上から左手の甲にある、まさにイルが言っていた痣を撫でてから意を決したように口を開いた。

『最後に、私が彼女の魂と記憶を持っていても、彼女とは別人だと思つて接してくれるなら、あなたの名前を教えて。』

麻里亜の必死な表情に、この事で何かあつたのだらうと感じつつ、そんな事はおくびにも出さずに心外だと言つた表情でイルは口を開いた。

『私は、実際に魂が生まれ変わる場を幾度となく見てきた。生まれ変わるという事は、その人種も、性格も、性別も、ありとあらゆるモノが別人になると言う事だ。何かしらの作用で、前世の記憶を持つていたとしても彼女と君は全くの別人だと思つて始めから接している。』

イルは自分の分の紅茶を全て飲んでカップを静かに下ろすと、ソファーに座り直して姿勢を正し、ゆっくりと両目を開きつつ言葉の続きを發した。

『君が始めに提示した条件の通り、“君の事を組織が見つける前に有った、私の探しモノに関するの出来事”について嘘偽りなく話し君の質問にも全て答えた。そして、君からの最後の質問にも嘘偽りなく答えよう。』

開ききつたイルの両目にあるのは、血の様に、ルビーの様に、バラの様に、この世に存在するどんな紅に例えても当てはまらないほど綺麗な紅い瞳。それは、1年前にフォルネ・リカルドの言葉に激

昂した彼が見せた瞳と同じ。しかし、今その瞳にはあの時の冷たさはなく、ただ優しい光を宿していた。

『“前魔王”や“悪魔の親”、“神の半身”、“病の名を持つ者”、“断罪者”、人間がつけた物では“公爵”や“黒き神の御使い”、“ロツソ”など色々あるが、私が唯一契約した彼女、ジャンヌ・ダルクが私につけた名は“緋の月”。

本当の名は……

イシュへ・カルム

………と言つ。』

1年後(4)：イル(後書き)

本編はこれにて終了です。

これからは脱字や表現のおかしな所を見つけてチヨコチヨコ直しつつ、番外編という形で閑話のような裏話的な物を書いていきたいと思っています。

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

？日前：閑話（3）（前書き）

今回も会話のみです。

彼らの弟sの苦勞（？）話。

結局、何と言おうと弟sは兄sが大好き、と言つ事なのです。

? 日前：閑話(3)

「はぁ……」

「ハア……」

「っ！ミカエル様、いらしてたのですか。」

「そう言う橋も、ヴァチカンにいるなんて珍しい。」

「私は、白鳳の副官から頼まれて……。」

「奇遇ですね。枢密院の為に来ていたのですが、私も兄の事で彼女

から頼まれて……。」

「あ、あはは……。」

「ふ、ふふふ……。」

「「お互い、苦労しますね。……はぁ」」

「……アレはどうにかならないのでしょうか。」

「ピアノコはマシですよ。アレこそどうにかならないものか……。」

「。」

「いえ、アレに比べればルシファー様こそマシと言えます。アレの

気まぐれ加減と言えば……。」

「まあ、その点ではアレの自由奔放の方がマシと言えますかね。」

「……そうですね。ですが、アレの統率力は目を見張るもので

あったのが、せめてもの救いでした。」

「それは……私も同意します。せめてもの救いと言うのなら、

アレに生まれて間もない悪魔からそれこそ太古から存在する悪魔ま

で、指揮下に置ける力があつた事には、私も安心しました。」

「あはは。ですが、アレの作戦立案の正確さときたら、普通の人間

とは思えません。」

「ふふふ。でも、アレのチェス以外のゲームメイクの正確さも、普

通の悪魔とは思えませんよ。」

「それでしたら、アレの××××の には、他の大佐達からも信

頼されているようで……。」

「そうですね。それよりもアレの　　の　　とえば、他の侯爵達からも信頼されているので……。」

「でしたら、アレの（以下略）」

「いえいえ、アレの（以下略）」

「……お前達、いつまでそこでそうしているつもりだ。あの2人を探していたのではないのか？」

「っ公爵様！」

「っお方様！」

「早く、お前達の兄達を探さなければ、ビアンコの副官が倒れてしまっぞ。」

「「アレと兄弟だとは思っていませんっ！！……はっ！し、失礼致しました。わ、私はこれで……。」」

「やれやれ……。」

しかし……統率力と支配力、作戦立案とゲームメイク、その後の比較内容からしても、2人ともお互いの兄の自慢を同じ内容でしていると気付いているのか？……まったく、人間と悪魔、種族は違えど兄も弟もそれぞれ似た者同士と言う事か。

? 日前：閑話(3) (後書き)

自分の兄について相談しているはずが、いつの間にか自慢話に……。

2人だけになるといつもの事で、それをイルや他の関係者が微笑ましそうに見ているのに気付いて2人は慌てて立ち去る、と言う日常生活風景。

兄sは始めから弟sの自慢話を始めて、最終的には周りを巻き込んだ勝負事になって、弟sが副官に怒られてしまつと言う裏話。

……副官の彼女を出したくなってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167i/>

優しき悪魔

2011年3月29日00時10分発行